

世界史は、世界と自分を理解する科目

ここでは、東進の実力講師陣の素顔に迫るエピソードを紹介。
10代の頃はどんなふうにご過ごしていた？ 何で教える仕事を選んだの？
どんな授業をしているの？ 知られざる講師の一面に迫ります！



「世界史では、社会でもつと必要なができる」

第4回

世界史
加藤 和樹先生

若くして既に10年以上の世界史指導経験を持つ気鋭の講師。史実に真摯に向き合い、自らの知識と経験を深める為に様々な国へ視察に行くのを趣味としている。世界史の持つ「必然性」と「展開」を重視し、それを図解して捉える授業は、「世界史に興味を持ってない」「自分は暗記が苦手かも」と思っている生徒の意識を180度転換させる。

「わからない」との出会い
僕の講師人生は、「二つのわからない」との出会いはじめました。一つ目は、小学校の頃の友人の「わからない」でした。当時、僕はきつと自分は天才なんだと思っていました。幼稚園の年長くらいから公文式をやっていたので、算数が得意だった。でも、話をしながら一つずつ問題を解消していくと、ある瞬間「あー！と、顔がぱっと変わる。僕は人が何かを「わかる」ときの表情が本当に好きだった。その思い出が小

学校6年生の頃。その頃から将来は先生になろうと考えていました。二つ目は、自分自身の「わからない」でした。僕の天才伝説は中学生になって終わりました。1年生の授業が始まり、1カ月ほど経つと黒板になにやら奇妙な文字が現れたのです。英語の「筆記体」です。まったく読めません。文法もよくわからない。残念ながら僕の英語の「わからない」は解消されなくなりました。高校3年生になるまでつまずき続け、浪人することになりました。

でも僕は、高校2年生になる頃、ある先生と一生涯の出会いを果たします。それは高校の世界史の先生でした。世界史といえは暗記モノのイメージ

が増えるからです。これが「わかる」ということ。自分でもそう理解できたとき、僕はただの先生ではなく、この世界史の先生のように、誰かに「わかる」を与えるスペシャリストになりたいと考えるようになりました。

予備校講師は「教える」プロ
高校3年生で中学生レベルの英語力しかない僕は、浪人することになりました。そうして初めて予備校の講義を受けました。ときに驚いたんです。さっぱりわからなかったことが、わかるからです。このとき僕は、「賢くなる」「スキルと教える」スキルはまったく別のものだと知りました。必ずしも賢い先生がより良く教えることができるわけではないことを、それまでの経験から知っていたからです。

予備校の先生の持つスキルは「教える」であり、それもプロ中のプロなのだと感じました。僕も教えるプロになりたい、そうして多くの人に「わかる」を与えたいと考え、将来は予備校の教壇に立つと決めました。

「わかる」「伝える」
「わかる」って何でしょう？ 僕の答えは、「わかる」とは「伝わる」ということです。社会に出たとき、いかに良いアイデアを持っていても、伝えられないと宝の持ち腐れです。ひとに伝える「わかる」を提供していくことは、社会で生きていくうえでもっとも重要なスキルです。

僕はサッカー観戦が大好きなので、世界史がわかるというのはどういうことかを、サッカーの起源についてのエピソードで話すことがあります。サッカーの原型であるフットボールは、イギリスのパブリック・スクールという全寮制の学校で親しまれていたレクリエーションでした。そして18世紀後半、イギリスで産業革命が始まり、19世紀に鉄道が整備されると、それまでは交流がなかったパブリック・スクール同士が交流し、フットボールの試合をやるようになった。

しかし、当時は統一のルールがなかったため、試合になりません。そこで、それぞれのフットボールクラブの代表を集めて統一ルールを決めようということになりました。そのとき、「手を使っても良い」というルールを支持したのが「ラグビー校」であり、手を使わないサッカー派と分裂することになったのです。

興味を持って関わるほど、世界史は自分の人生と深く関わってくる。そしてより深く「わかる」ことができる。そしてひとに「伝える」ことができる。僕にとって予備校講師はそんな発見に満ちた仕事なんです。

地図は世界史学習の土台 「白地図」で国の位置を覚える

入試問題はほとんどの場合白地図。白黒の地図は陸地と海の区別がつきにくく、普段から白地図を見慣れていることが大切。地図をきちんと覚えることと丸暗記しないで済む。例えば「タイのアユタヤ朝がビルマのコンバウン朝に征服された」。これも地図を理解していれば、隣国同士の戦いだとしてすぐ理解できるのです。

一問一答

どんな性格って言われる？
性格は明るくてクラスでも目立つタイプだったかな。ちなみに小学生時代は太っていました(笑)。

好きなスポーツは？
無論、サッカー。試合時間が長いのに得点シーンが少ないスポーツだと言われるけれど、どんな戦術が得点につながっているかを分析するとおもしろい。世界史と似ているかも。

好きな歴史上の人物は？
ドイツのビスマルクという天才的な政治家。彼は19世紀後半、ドイツを成長させるためにヨーロッパの外交を牛耳っていく「ビスマルク時代」を形成する。国家間のwin-winの関係性を獲得する手法がうまいんです。

「世界史の勉強法をはじめからていねいに」
加藤 和樹 / 著(東進ブックス)

お答えします！

講座紹介

楽しく世界史を「理解」して一気に入試問題レベルへ！

スタンダード世界史

文化史も覚えるコツがある！
文化史が苦手な人って多いですね。ただ、例えば絵画に潜むエピソードを知ること、がぜん興味が湧くようになります。この一枚もそう。ナポレオンの母親はナポレオンが皇帝になることを望んでおらず、戴冠式に列席しませんでした。しかし、この絵を描いたダヴィッドは実際にはいなかった母親を観覧席に描き、この粋な計らいにナポレオンが感激して喜んだそうです。英雄も一人の子だったことを感じた、印象的な逸話でした。

▲ダヴィッド「皇帝ナポレオン一世と王妃ジョセフィーヌの戴冠」

「歴史の因果関係を考える」ってどのように考えればいいんですか
A 国同士の争いをケンカに置き換えてみる
トラブルにも仲直りにも原因がある

世界史の膨大な知識をただ単に暗記しようとすると、なかなか頭に入りません。例えば、1775年のアメリカ独立戦争は、財政難であったイギリスが植民地であるアメリカに課税をしようとしたことに対し植民地側が怒り、課税を拒否して喧嘩に発展した。これが独立戦争の原因です。何だか兄弟喧嘩のようでもありますよね。世界史もしっかりと原因を掴むと、覚えやすいんです。

講座のココがポイント！

- ▶原因を考えながら勉強できるようになるから、膨大な知識も覚えられる
- ▶タテ(一つの国)とヨコ(同時代の他の国とのつながり)の流れを掴み、大きな流れを理解できる
- ▶世界史を知ると、現代の世界で起きている問題が理解しやすくなる

授業のやり方！